

國際漢學の出現と漢學の變容

高田時雄

はじめに

最近、中國で國際漢學という語をしばしば耳にするようになった。この語を標題とする雑誌が刊行されたり、國際學會の名稱にもよく用いられるから、とくに中國學の専門家でなくとも、小耳にはさむ機会があるのではなかろうか。その動きは中國ばかりでなく、臺灣や廣く華人世界全體に及んでいる。これはやはり新しい動向であろうし、なによりも中國學が質的な變容を遂げつつある兆しのように思われる。一方、日本國內において、あらゆる研究分野の見直しと再編が要請されている現在、中國を對象とする學術研究の今後のあり方を考える上でも、このような變化には敏感にならざるを得ない。しかし漢學という名稱の涵義にせよ、それに國際を冠した場合の實質的な内容にせよ、必ずしも明確な把握がなされているわけではない。とくに漢學という用語が、中國と日本においては、歴史的な經緯から、かなり異なった意味をもっているところにも困難な點が存在する。そこで、いささか遠回りとも思われるが、「漢學」という語の概念と用法に關して、簡單に見ておくことから小文をはじめたいと思う。

「漢學」とは何か？

中國では、「宋學」「明學」「清學」のように朝代の名稱を關して、それぞれの時代を主導した學問傾向を言うことが一般に行われる。「漢學」もその脈絡の中で漢代に特殊的に發達した訓詁の學を指して言い、さらには清朝において例えば宋學の過度に理念的な風潮を排し、漢代の學風を祖述する傾向が顯著になったが、それをもまた漢學と稱した。簡單に言ってしまうと、いわゆる清朝考證學であり、樸學である。かなり近年まで、漢學はその意味で用いられることが、むしろ普通であったと思われる。しかしここで問題とする漢學は、今日一般に通用することばで言えば中國學のことであり、それがどのように又いつから用いられてきたかということである。

最初に言ってしまうと、漢學はおそらくヨーロッパのシノロジーの譯語として導入されたものであろうと思われる。したがってその起源はきわめて新しい。過去の中國では、自國の學問がすべてであり、それ以外に學問のありようはずもなく、したがって中國の學という意味での漢學概念はきわめて發生しにくかったのである。もちろん十六世紀末以來イエズス會をはじめとするカトリック宣教師がヨーロッパの學藝を中國に持ち込み、「西學」という用語が現れはしたが、その正しい認識が社會に受け入れられることはなかったし、まして漢學の對概念として意識されることも絶えてなかった。清末、西力東漸の波に乗って、ふたたび「西學」が中國に上陸し、今度は中國人自身によってその研學が興起するが、その時點でも對概念としての「漢學」の語が取り上げられることはなかったのである。傳統的な中國の學問は、なお獨自の王國のなかに自らの世界を見いだしていた。

新しい意味の漢學は、まったく別のところ、ヨーロッパの學問すなわち「西學」の末端に位置する東洋學の、そのまた一分科をなすシノロジーの譯語として中國語語彙の中にささやかな位置を占めることから始まったのである。シノロジーの譯語としての「漢學」の最初の用例が何である

かは、未だ詳しく調べていないが、おそらく王韜あたりが最初ではないかと思う。王韜の「法國儒蓮傳」に、スタニスラス・ジュリアン（Stanislas Julien）の著作『漢學指南』が取り上げられている¹。この書はもちろんジュリアンの代表作の一つ *Syntaxe nouvelle de la langue chinoise*（1869）のことを指している、その正しい中文名稱は『漢文指南』だから、これが王韜の誤りであることは明白なのだが、そのことは別にして王韜が「漢學」と譯したのは、この語のなかにフランス・シノロジーに代表されるヨーロッパの中國研究を意識していたことは窺えると思う。

もちろん外國に對して中國固有の學術を表現するために「漢學」が用いられた用例を、文獻中に求めようと思えばそれは不可能ではない。近い過去において「滿學」に對する「漢學」があり、古くは西夏國に「蕃學」に對する「漢學」が存在した。しかし中國の歴史でこのような「漢學」の概念を探ることは、とりもなおさず「漢」民族が如何に認識されて來たかの歴史を考察することとほとんど等價であり、「漢語」や「漢字」「漢文」などの用例とあわせて調査する必要がある。ここはもちろんそのための場ではないし、用意もない。しかしこの種の「漢」の字を冠して、外國との區別を明らかにする用例は、當然ながら、基本的に邊境に關わる文獻にしか出現せず、中國一般にどれほど安定した使用がなされていたかは疑問である。とくに「漢字」「漢語」のような單純明快に他と區別し得る要素ではなく、「漢學」のようなトータルな枠組みを表現しなければならない語彙の定着には、まだまだ必要な準備が整っていなかったというべきであろう。さらに上に擧げたような他民族とのかかわりで登場する「漢學」はすべて外（四夷）から見た概念であり、中國人の自發的な用語ではないことに注意すべきである。

近代の漢學

さて上に述べたように、近代初期の中國では、漢學といえば、清朝考證學を指すことが一般的であり、ヨーロッパの中國研究を指すことは次第に行われるようになっていたとはいえ、かなり特殊な用法であったといえる。西洋の學術すなわち「西學」が滔々として中國に押し寄せたときにも、受けて立つ中國固有の學問の反應は緩慢そのものであった。それは近代科學など技藝を主とする西學と、經史詞章の學を内容とする中國固有の學問とは、正面切って對決する場がそもそも缺如していたからだとも考えられる。したがって具體的なありようから言って、「西學」に對する概念はむしろ「古學」であったかも知れない。それは「西學」が「新學」であるということをも踏まえて、新・古という面でのみ對立點を見いだした呼稱である。不思議といえば不思議なことに、「西學」に對する「漢學」という用語は出現しなかったのである。その意味で、自覺的に「西學」に對するものとして生まれたのは「國學」である。この語は中國固有の學術を表現する上では、なるほど一定の適性を備えているといえる。しかしこの語は、たとえば「洋貨」にたいする「國貨」のごとく、内・外の對立をはらんだ概念であり、客觀的な「漢學」とはやはり異なる。日本における「國學」が「漢學」に對する概念として生まれたことと比較すれば、その成立を支える力學は明かである。

ともあれ、「國學」はやがてかなり大きな意味をもつこととなる。民國十一年一月、北京大學に將來大學院を設置するための準備として研究所が置かれることとなり、國學門の一科が設けられた。ちなみに他は三門は自然科學、社會科學、外國文學である。その國學門の機關誌が『國學季刊』であり、國學門の中はさらに文字學・文學・哲學・史學・考古學の五研究室に分かれていた²。胡適は『國學季刊』の「發刊宣言」のなかで、過去三〇〇年の古學研究の缺陷を指摘し、新しい「國學」を提唱する。胡適によれば、中國のあらゆる過去の文化をあつかう學問は「國故學」であり、その略稱が「國學」である、という。また「國故」という表現は、「國粹」も「國渣」も含み、中

¹ 『波園文錄外編』卷十一、一九五九年、中華書局排印本、三三八頁。

² 「研究所國學門重要紀事」『國學季刊』第一卷。

立的で褒貶の意味がないのでよい、とも主張する。その上で、新しい「國學」の任務として、(一) 研究範圍の擴大、(二) 研究資料の系統的整理、(三) 比較法の廣範な採用、を提起した。その内容にはすこぶる革新的な部分も含まれ、運動として積極的な側面を備えているものの、こうした努力は畢竟、古學を國學として時代に即應するようなかたちで再生せしめようとするものであった。客觀的な意味における中國學としての「漢學」はなお成立していないといってよい。このように見てくると、「漢學」という語で中國學を表現することが、如何に大きな變化であるかが理解されるであろう。

そして國際漢學の出現

ヨーロッパ中國學を翻譯するための用語としての「漢學」は、しかし、時代とともに着實に定着しはじめる。それはヨーロッパの研究機關がこの用語を採用して自ら名乗ったということも與って力があつたと思われる。たとえば中國國內では北京にあつたフランスの中法漢學研究所 (Centre franco-chinois d'études sinologiques) などがその典型であろう。この研究所では一九四三年に「十八世紀十九世紀之法國漢學」(Deux siècles de sinologie française) という展覽會を開催したし、一九四四年から四九年までは、名稱もそのままの『漢學』(Han Hsiue) という雑誌を出していた。しかしこの用語が頻りに用いられるようになるのは、やはりかなり新しいことと言わねばならない。臺灣では一九八三年に漢學研究中心という組織が出現した。北京では、やや遅れて一九九四年に『國際漢學論壇』、翌一九九五年に『國際漢學』という定期刊行物が出版されはじめた。前者は西北大學國際文化交流學院と同じく西北大學漢學研究所の編集、後者は任繼愈氏を主編とする編集委員會の編刊である。前者は第一巻を出したただで中斷しているようだが、後者は順調に繼續し、現在までに六輯を出している。本來、「漢學」といえばそれだけでも外國人の中國研究のことを指すものであつたはずであるが、ことさらに國際をかぶせる必要性を感じだしたところに、むしろ「漢學」の語義の變化があると思われることができるかもしれない。しだいに外國人による中國研究のみならず、もう少し廣い意味を持ち始めているのであろう。注意すべきは同じ意味合いで「中國學」という表現も同時期に現れていることである。嚴紹璽氏によれば、北京大學中文系古典文獻專業では一九八三年に日本中國學課程を開設し、一九八五年には北京大學古文獻研究所内に國際中國學研究室が置かれ、國際中國學の碩士生を募集しはじめたという。嚴氏は、それを踏まえて國際中國學(漢學)は八〇年代の半ばに獨立した分野として成立したと言っている³。今後「漢學」が一般化するのか、「中國學」が一般化するのかはなお豫斷を許さないが、現状では「漢學」のほうがやや優勢な気がする。

いずれにせよ「漢學」は、今日しばしば用いられるようになった。しかしだからといって、「漢學」が「國學」に取って代つたということではない。「國學」の名稱はなお存在するし、雑誌の名稱や組織名に盛んに用いられている。むしろ改革開放以後に復活してきたというべきであろうか。これは中國では「國學」という呼稱に、日本ほどのマイナス・イメージがないということも關係があるかも知れない。戦前の國家主義的イデオロギーを體現した「國學」は、日本ではいかんせん、その存在を聲高に主張し得ない事情がある。したがって日本には「國學」を標榜する組織はきわめて稀である。のみならず日本では、一時期、國文學を日本文學に、國史學を日本史學に名稱變更することが流行ったことさえある。

ともあれ「漢學」の呼稱は、今なお色濃い外來的色彩を帯びていることも否定しえない。日本でも日本學といえば若干そういう嫌いがあるが、中國における漢學はまだ一層外來色が濃いと思われ

³嚴紹璽「我對國際中國學(漢學)的認識」『國際漢學』第五輯、二〇〇〇年、一五頁。

る。したがって「國際漢學」という語で表現される内實は、主として「(中國以外の)諸外國における中國研究」の紹介が主たる内容である。しかしながらまた一面では、自國における中國研究を外國に向かって宣傳する場、端的にいえば世界の中國學における中國自身のリーダーシップの回復宣言であるともいえる。「中國は漢學の故郷であり、理の當然として國際漢學研究の中心であらねばならない。これは幾世代にもわたって中國の學者たちの宿願であった」というのは、まことに事柄の真相を表わした正直な主張であると思う⁴。

日本の漢學

さて日本における「漢學」の呼稱はどうかというと、當然ながら中國とは大いに事情が異なる。明治期以前の日本には、學問の正統として漢學があり、それに相對する國學、さらに外來要素としての蘭學の三種の學統があった。それが明治以後の歐化政策とともに、蘭學を承けた洋學が他に抜きんでて重視され、ほとんど洋學一邊倒の状況が生まれる。そのかたちは今日でも基本的に變っていない。もっとも長い歴史を持ち、かつかなり日本化した形態で行われていた漢學は、日に日にその成立基盤を失っていく。「我邦に於ては、漢學と國學とは相須ちて用を爲すもの、決して偏廢す可からず」⁵といった漢學の勢力挽回を求める議論も、大局的にはなんら實効をともなったものにはなり得なかった。孔孟の徳義を説くことに終始する舊來の漢學は、新しい時代思潮に馴染まないものであったから、文獻學に基礎を置く實證的な學問としての中國研究にその席を譲らねばならないのは必然でもあった。新しい學問領域としての中國研究は、日本でもやはりヨーロッパ中國學の大きな刺激を受けて成立したものである。もちろんゼロからの出発はあり得ないわけで、そのためヨーロッパ中國學の影響だけではなく、舊漢學を地盤としたこともまた事實であるが、新しい學問として再生するためにはむしろ自らの地盤を否定する必要があった。したがって新しく勃興しつつある學問に對して「漢學」の呼稱を採用するわけには行かなかった。そこでいわゆる「支那學」が興起することとなるのである。それがもっとも明確なかたちをとって現れたのは京都の支那學であろう。雑誌『支那學』の「發刊の辭」(一九二〇)には「應神以還、常に我を導くものは漢學、突如として之を覆すものは西學、學もまた浮沈あるか。……人の支那學を顧みざる、當世より甚だしきは莫し」という。漢學の置かれた状況は、悪くなりこそすれ、決して改善されたわけではないが、「支那學」という新しい名稱を用いることで、沈滞した漢學の風土に清新な風を吹き込むことに成功した。もちろん名稱變更のみではなく、新しい實證的な學問分野も「支那學」のもとに着實な成長を遂げていくことになる。

かといって支那學の用語がこの時に始まったというわけではなく、かなり早い時期すでに使用されていたことが分かっている。明治二八年というから一九〇五年であるが、『帝國文學』第一卷第二號の雜録欄に掲載された「現今の漢學」という一文に、次のように書かれている。「今日少壯有爲の漢學者哲學者の間に、支那學の科學的研究の運動大に起らんとするの傾向あるは、我學術社會の大慶事と謂ふべし」⁶。ここに用いられた「支那學」はまさに西洋のシノロジーの譯語として用いられている。したがって「支那學」という呼稱は、中國語における「漢學」とほぼ同じニュアンスをもつことばであったと想像される。雑誌『支那學』がこの呼稱を採用したのには、ヨーロッパ中國學が一個のモデルとして存在していたと思われるのである。ちなみに狩野直喜は「支那學」に註して以下の如く言う。「我が國にて古來より今日に至るまで漢學と稱するは、漢土の學術を意味し、支那學と同一物ではあるが、漢學なる名稱は學問的の名ではない。又其意味も漠然として漢

⁴ 『國際漢學』卷頭語、一九九五年、北京、商務印書館。

⁵ 重野安緯「日本的漢學に就いて」、『漢學』第一編第一號、一九一〇年。

⁶ 小島祐馬「狩野先生の學風」、『東方學報・京都』第十七冊、昭和二十四年。

學の定義を與へることは困難である。しかのみならず、此の語は我が國と中國とで用法を異にして居る。中國人の所謂漢學なるものは自から一定の意義を有し、經學の一派であつて兩漢の訓詁學を指し、即ち宋明の理學に對して言ふのである。清朝の考證學も亦漢學の流派である。故に誤解を避ける爲め、學問としては支那學と稱するのが妥當であると思ふ。現に西洋にても中國の事物に關する學術的研究を名づけて「シノロジー」(Sinology, Sinologie)と稱し、其の研究者を「シノログ」(Sinologue, Sinolog)と稱するが、此れ正に支那學、支那學者の義である⁷。狩野はまさに京都の支那學を領導した人物であるが、狩野自身が「支那學」とは西洋の「シノロジー」と等價であるといっている點は重要である。明治以降ひたすら近代をめざした日本は、中國研究においてもヨーロッパのそれにひけを取らない近代的な學問を形成する必要があつた。「支那學」はその實現のひとつのかたちであつたといえよう。

漢學の變容と今後の展開

さて「漢學」の呼稱問題に終始してしまつた嫌いはあるが、一應ここで話しの締めくくりをせねばならない。日本社會が現在大きな轉換點に立っていることは、しばしば指摘されるところだが、それは中國學という小さな分野においても同様である。かつて歐米、日本、そして中國自身において、相應の接觸や交流はあつたにせよ、それぞれ獨りに發展して來た歴史を背景に孤立的に存在していた中國學が、現在では單一の國際的な舞臺を持つことになりつつある。世上で用いられることばを使うなら、グローバル化と言ってもいい。交通手段や情報科學の目を眩るような發展のお陰で、國際學會の開催は頻繁になり、データベース構築の國際的協同も始まっている。中國學の世界は、それと氣が付かない内に、變容を遂げつつある。そして舞臺の主役は今や確實に中國自身の「漢學」なのである。この變容の構圖を認識することなしには、日本における中國學の將來もおそらくは具體性を持ち得ないだろう。もはや日本固有の中國學はその存在理由を失い、「國際漢學」の中に自らの場所を見だし、そこで然るべき貢獻を果たすことしか殘されていない、といえ言過ぎであろうか。もちろん日本の獨自性は強く主張すべきだし、日本の中國學が傳統的に優位に立っているような分野では一層その發展に努力すべきことは當然である。この點は歐米の中國學の場合にもあてはまる。全體として「國際漢學」が發展すれば好いのである。

實際上の問題としても、近年、中國各地から陸續として發見される新發見文物の調査や、また考古・言語・社會・人類など現地調査を必要とする分野では、研究活動は中國との協同なしにはほとんど考えられない状況にある。そのためには日本側でも、公私圖書館をはじめ社寺さらには個人の所蔵になる資料を積極的に公開していく姿勢が必要である。さらに言語の問題がある。そしてこの問題は非常に重要である。國際學會における使用言語にせよ、論文の發表言語にせよ、今後中國語の重要性は格段に増大して行くであろう。「國際漢學」の一翼を擔い、そこで然るべき貢獻をしようと思ふなら、日本語では問題にならない時代は目前に迫っている。また第二言語としては英語の使用もやはり増大するに違いない。國際語としての英語の地位は當分のあいだ不動だろうからである。

問題は、このような急速な展開に日本の中國學が現状のままで對應可能かどうかという點である。卑見では日本の高等教育の現場においてその體制が準備萬端整っているとは到底言い難いと思う。言語能力だけがすべてではないが、「國際漢學」の新しい動向にトータルな意味で適應可能な人材育成のための新しいシステムが強く要請されているのである。確かに日本の中國學がこれまで多くの輝かしい業績を擧げてきたことは事實であろう。しかしその傳統の上に胡座をかいてい

⁷ 「中國哲學史序説稿本」『東方學報・京都』第十七冊、昭和二十四年。

は、気が付いたときに世界から取り残されているということにもなりかねないのである。新しい時代に向けた準備を急ぐ時が来ている。

本稿は二〇〇一年六月二四日東京大学において開催された中国社会文化学会における発表を文章化したものであり、たぶんそれ以上でも以下でもない。必要な事柄を増補する予定であったが、諸般の条件がそれを許さなかった。舌足らずな部分や粗雑な論理については諸賢のご海容を請いたい。